

# 一八九六年中国人日本留学生派遣・受け入れ 経緯とその留学生教育

酒井 順一郎

## 1 序言

日清戦争後の一八九六年、清国政府は十三名の留学生を日本に派遣した。一般にはこれが中国人日本留学の嚆矢であるが、あくまでも日清両国政府当局者間の外交折衝による官費生としての組織的留学生派遣の起点であることをここで確認しておく。<sup>①</sup>日露戦争後の一九〇六年には一万〜二万名もの中国人留学生が来日し、帰国後中国の近代化に貢献したのである。

近代中国人日本留学生に関する先行研究は多くの研究成果が発表されている。しかし、この分野の権威であるさねとうけいしゅうを初めとする先行研究は中国人日本留学の嚆矢に関しては触れられていない程度である。<sup>②</sup>後述するが、筆者の調査によればそれらの先行研究は留学生の名前や年齢すら史実と違い、派遣人数に関しても疑問

であり、その派遣・受け入れ経緯、教育実態も十分に論じられていない。このように中国人日本留学の嚆矢は全く研究されていない。たといっても過言ではない。これは中国人日本留学生史を論じる上で大きな問題である。

したがって、本稿では一八九六年の清国人留学生の派遣・受け入れの経緯、そこで実施された教育実態を蒐集した一次資料から分析・考察する。

## 2 留学生派遣・受け入れ経緯——十三名の留学生と一名の補欠留学生——

前述した通り組織的中国人日本留学の嚆矢は一八九六年の十三名の留学生である。外務省外交史料館所蔵記録によれば、同年五月二十五日、駐日公使裕庚は外務大臣陸奥宗光に約十名の留学生教育を

依頼している。<sup>③</sup>陸奥は文部大臣西園寺公望にこれを照会した。しかし、西園寺は留学生らの日本語能力問題から官立学校に於いてその教育はできないと回答した。<sup>④</sup>それにもかかわらず裕庚は、同年六月十六日、文部大臣兼外務大臣西園寺に十三名の留学生教育を依頼している。<sup>⑤</sup>同年清国政府は欧米諸国へ三名ずつ留学生派遣を決定している。<sup>⑥</sup>おそらくこれは前年に総理衙門が露、英、仏、独、米それぞれに三名ずつ留学生派遣を決定したものと同様のプログラムだろう。<sup>⑦</sup>そしてこれと並行して日本にも留学生派遣を決定したのである。既に派遣決定したものをおいそれと中止することはできなかったのだらう。

裕庚から留学生教育を依頼された西園寺は東京高等師範学校校長嘉納治五郎に相談をした。嘉納治五郎によればその相談内容は以下の通りである。<sup>⑧</sup>

(前略) これまで清國公使館では公使館の學生といふものがあつて、公使館内で教育をして居つたのであるが、之を日本の然るべき人に託したいから引うけてくれまいかといふ相談である。

「公使館の學生」は「使館學生」であらう。十三名の留学生らは、裕庚が理事官の呂賢笙を上海・蘇州地方に派遣し「使館學生」として招募、その後、総理衙門での選抜試験を受けこれに合格した者で

ある。<sup>⑨</sup>

では、公使館内でどのような教育をしていたのであろうか。それは日・英・独・仏の各語学教育であった。<sup>⑩</sup>十三名の留学生来日以前から既に「使館學生」は存在していた。しかし、結果的には既に来日していた「使館學生」でなく上海・蘇州地方から招募された十三名の教育を依頼したのであった。

十三名の留学教育目的は何であらうか。外務省外交史料館所蔵記録によれば、裕庚は日本文と日本語を中心に考えていたという。<sup>⑪</sup>一般に日清戦争後、日本勝利の要因として立憲制度と国民教育の普及と考えた清国は国家再建のため実用的な西洋学を学ぶために日本留学を開始したといわれている。しかし、最初の組織的中国人日本留学生である十三名の留学目的はあくまでも日本語の専門家、つまり通訳官養成のためであったといえる。

西園寺公望に相談された嘉納治五郎は、どのような受け入れを考えていたのであろうか。嘉納治五郎は、当時のことを以下のように講述している。<sup>⑫</sup>

さしより自分に名案とでもなかつた。自分は迎も暇がないから直接世話は出来ないが、誰か人を選び、直接には其人に世話をさせ、自分は間接に指導・監督をするなら差支がないといふ答をした所が、それで宜しいからといふことになり、三崎町に

塾舎を設けて、いよいよ支那人の教育を引き受けた。

当時の日本は、「脱亞入欧」のもと留学の主流は欧米への派遣であつたため、留学生受け入れは予想外のものであり、戸惑つたに違いない。この後、嘉納は「清国保全」と「唇齒輔車」を掲げ日中関係が東洋の平和に繋がるとし、その一端を担うための留学生教育が必要だと主張したが、当時はその考えに至つていなかった。また、留学生の日本語能力問題から官立学校での教育を拒否した日本政府も留学生教育の意義を見出すことはできていなかった。

嘉納は学校長をしていた東京高等師範学校に受け入れず、塾程度の受け入れ施設（以下嘉納塾と称する）を用意したが、十分な受け入れ態勢を整えることができないまま、留学生教育を始めることになる。

晴れて最初の留学生に選ばれた十三名は、唐寶鏐（十九歳）、朱光忠（二十二歳）、胡宗瀛（二十歳）、戢翼翬（十九歳）、馮閻謨（二十歳）、呂烈輝（十八歳）、韓壽南（二十三歳）、王作哲（十九歳）、趙同頤（十九歳）、李宗澄（十八歳）、瞿世瑛（十八歳）、金維新（十八歳）、劉麟（十八歳）である。<sup>14</sup>年齢として十八歳が五名と一番多いことがわかる。先行研究では瞿世瑛ではなく呂烈煌を十三名の留学生としてゐるが、裕庚が西園寺に送った記録文書によれば瞿世瑛は、れっきとした最初の留学生である。<sup>15</sup>

十三名の留学生は一八九六年六月三十日に嘉納治五郎が用意した神田三崎町一丁目二番地にある学校兼寄宿舎である嘉納塾に送入された。しかし、同年十月、韓壽南、王作哲、趙同頤、李宗澄ら四名は留学を諦め帰国した。<sup>16</sup>その理由は「疾病ニ罹リ或ハ事故ニ由リ已ムコトヲ得ス半途帰國スルモノアリ」という。<sup>17</sup>しかし、唐寶鏐はその理由を、第一は日本の子供からチャンチャン坊主と冷やかされたこと、第二は日本食が口に合わなかったことであると述べている。<sup>18</sup>周知の通り当時の清国人の髪型は辮髪であつた。子供達が冷やかしたことは髪型に対する珍しさ、日清戦争の勝利からの優越感によるものと考えられるが、国家の選抜試験に合格したエリートである彼らにとって屈辱だつたに違いない。この後、留学生にとって辮髪は大きな問題となってくる。辮髪を切ることで留学生仲間嫌われたり、監督官に官費を止められ帰国させられたものもいた。一般に辮髪を切ることは清朝を離脱する意思表示であつたといわれている。しかし、魯迅の短編の登場人物は、「僕は留学すると辮髪を切つた。別に深いわけがあつたわけではなく、とにかく不便であつたからだ」<sup>19</sup>と述べているように便宜的な理由で切つた者もいたといえるだろう。また、一九一〇年に皇帝が剪髪令を下すべきだという意見が朝廷内に現れ、ジャーナリズムや資政院に於いても盛んに議論された。したがって、辮髪を切ることを単に打倒清朝の象徴と考えることはできない。これについては別の機会に論じる。

では、第二の理由の日本食であるが、これも後に大きな問題となる。黄尊三（早稲田大学清国留学生部高等予科中退、明治大学法学部卒業、帰国後は民国大学教授）は日記に於いて「夕食は汁と卵、飯も小さな箱に盛り切り。初めて食べてみると、具合が悪い」と述べている。<sup>(20)</sup>また、宏文学院教授であった三矢重松の日記には留学生全員が朝飯を食べなかったと記されている。<sup>(21)</sup>さらに、日華学堂に於いては賄い方の解雇運動にまで発展したほどである。<sup>(22)</sup>多くの留学生は食生活に悩まされたに違いない。このような背景から神田界限には、続々と中華料理店が出現してくる。

現在も神田にある「漢陽楼」の三代目店主顧定源によれば、「当時から中華井、焼きそば、肉そばなどという日本風のメニューもあったようですが、名前は中華井でも、臓物料理が載せてある井で、やはり日本人の口にはなかなかあわなかったでしょう」という。<sup>(23)</sup>また、一八九九年に神田で開店し、今も神田で一番古い中華料理店といわれている維新號三代目主人鄭東静の弟であり専務取締役鄭東耀によれば、「当初は留学生相手の中華食堂であった」という。<sup>(24)</sup>したがって留学生専門の中華料理店が多かったといえる。東京に続々と出現した中華料理店に対し、日本人はどう思ったのであろうか。維新號所蔵資料に、常連客の文書がある。それによれば、その常連客の祖父は明治から維新號に食事をしに来ていたという。<sup>(25)</sup>当時の味は日本人の口には合わなかったようだが、おそらく少数ではあるが一

応は日本人も中華料理を食べにきていた証左である。維新號の開祖である鄭餘生は大正末期から日本女子大で家庭料理としての支那料理教室を開いており、この時期から日本の上流層の家庭料理に中華料理が広まったという。<sup>(26)</sup>つまり日本化した中華料理がここに誕生したのである。またその後の日本の食文化にも影響を与えたに違いない。これは留学生がきっかけとなったといえよう。

これら二点の理由は後に多くの清国人留学生にとって大きな問題となるが、十三名の留学生来日に於いて早くも生じていたのは注目に値すべきことである。

一八九六年十月、裕庚は帰国した四名の留学生の代わりに黄濂清（二十三歳）と呂烈煌（十六歳）の兩名を補欠留学生として派遣した<sup>(27)</sup>と外務大臣大隈重信に依頼、日本側はこれを承諾した。しかし、黄濂清は病気のため来日できず、同年十二月、呂烈煌のみが嘉納治五郎の下に留学することになる。<sup>(28)</sup>呂烈煌は先に来日した呂烈輝の弟である。

一般には十三名の留学生だけが最初の留学生だといわれている。しかし、十三名の留学生の内、途中帰国した四名を補うために補欠留学生である呂烈煌も加えるべきだろう。したがって本稿では組織的留学生派遣の起点は十三名の留学生と補欠留学生一名とする。

では、嘉納治五郎の下で十名が教育を受けるのであるが、その教育実態はどのようなものだったのだろうか。次章で論じることにし

よう。

### 3 留学教育実態

資料が極めて少ないことから嘉納塾の教育実態を十分に論じることとは難しい。したがって現存している資料並びに文献からできるかぎり論じてみよう。

前述した通り嘉納は多忙を理由に直接教育を行わなかった。そこで監督兼教育主任を東京高等師範学校英語教授の本田増次郎に命じた。本田は留学生らと起居を共にして留学生教育を行った。その他の講師として吉田彌平、後藤胤保、松下俊雄である。<sup>(29)</sup> 唐寶鐸の証言によれば、日本語担当は本田、後藤は数学・物理を担当したという。<sup>(30)</sup> 本田は英語教師ということで日本語教育を任されたのではないだろうか。尚、後藤は東京高等師範学校教授でなく、中学の教師だとい<sup>(31)</sup>う。こうして十名の留学生の三年間に及ぶ留学生生活が始まることとなる。

では、教科内容を見てみよう。前述したが彼らの留学目的は日本語専門家である。したがって日本語教育だけでもよかったはずである。しかし、彼らが受けた教科は多数に亘っている。講道館に所蔵されている十名の留学生（胡宗瀛、唐寶鐸、金維新、瞿世英、劉麟、呂烈輝、呂烈煌、朱光忠、戡翼鞏、馮閻謨）の各教科の答案用紙によれば、「東語（日本語）」「理科」「算術」「地理」「歴史」を学習してい

ることがわかる。<sup>(32)</sup> これら以外にも「英語」「体操」も行っていたという。<sup>(33)</sup> しかし、講道館所蔵の胡宗瀛の卒業証書に「日本語ヲ本科トシ地理歴史數學理科ヲ副科トセル」と記されていることから「英語」はおそらく教育されていないだろう。「体操」に関しては嘉納が学生及び職員の健康・体力の向上に特に留意し、奨励していたことから行われていたであろう。<sup>(34)</sup> 尚、「理科」と「体操」は東京高等師範学校で行われたが、これは三崎町の嘉納塾校舎にはその実験道具や施設がなかったからだろう。以上から日本語教育だけでなく普通学も教育していたことがわかる。

一九〇四年「奉定学堂章程」発布から中国の近代学校制度が成立するが、当時は、府州県学や書院など各種の教育機関が科挙制のもとに存続しており、その教育内容は四書五経の訓詁註釈及び八股文の作成を中心とした古典教育が中心であった。

横山健堂によれば相当な学者と称すべき者でも理化学等に於いては小学の児童も同じであったと証言している。<sup>(35)</sup> したがって嘉納は当時から普通学の必要性を強く感じていたに違いない。これが後に日本語教育と普通学を中心とした中国人予備教育機関の大本山といわれる宏文学院を創設するに至るのである。つまり嘉納塾は中国人予備教育の基礎を築いたのである。これは先見の明があったと評価してよい。

さて、嘉納塾の教育実態を理解する上で、前述した講道館所蔵の

留学生十名の答案用紙は極めて有力な手掛かりとなる。試験実施日は「算術」と「歴史」と「地理」は一八九八年八月である。「東文（日本語作文）」は課題の一つが「歳晚述懐」とその内容から一八九七年十二月末、また、「理科」は一八九八年七月と推測できる。<sup>(38)</sup> 試験科目及び問題は以下の通りである。

1 嘉納先生試験（日本語）

嘉納治五郎が話し、その大意を書かせる。聴解・スキミング・作文能力を測る。

2 東文（日本語作文、全二問）

課題「歳晚述懐」「新年を賀する文」

3 理科（全七問）

一 蓮ノ葉又ハ水鳥ノ羽等ニ水ノ滴ルトキ轉々球状ヲナシマ  
スワケヲ解ケ

二 堅硬性受展性應抽性ノ最も高キモノ各一ツノ品名ヲ問フ

三 淡水ニ食塩ヲ溶解スレバ重クナリマス如何ナルワケデセ

ウ

四 水ヨリモ重キ固体ノ比重ヲ見出ス仕方

五 火事場ニハ何故カ其近傍四方ヨリ風ノ起ルモノナリ其ワ

ケヲ説明シナサイ

六 ヒーロー氏噴水器ノ圖

七 兩國橋ニテ烟花ヲアゲテ居ルヲ御茶ノ水橋ヨリ見マシタ  
ニ發射ノ光ヲ見テカラ五秒間スギテ音ヲ聞キマシタ此ニ橋  
ノ距離何程

4 算術（全二問）

一 分數ヲ分數デワル方法ト理論トヲ示シナサイ

二 或ル數ヲ九デ割ルコトガ出來ルカ出來ナイカト云フコト

ヲ早ク知ル仕方ハ如何デスカ又其ノワケハ何デスカ

5 地理（全四問）

一 日本ノ政治組織ヲ述ベヨ

二 北海道ノ重ナル都會港灣及ビ物産記セ

三 日本諸州ノ氣候人情ノ異同ヲ叙セヨ

四 地圖指點

6 歴史（全三問）

一 日本ガ西洋ト商賣交通スルコトノ沿革ヲ書キナサイ

二 憲法發布ノ由來ヲ述ベナサイ

三 徳川光圀 大岡忠相 本居宣長 林子平 大久保利通

此ノ人人ノオモナ事跡ヲ記シナサイ

答案用紙は解答だけでなく問題文も各留学生が書いていることが特徴である。教師が問題を口頭で行いそれを書き取らせたのだ。<sup>(39)</sup>

「理科」は基礎学力養成を目指しており、「地理」と「歴史」は日本

表1 試験成績評価

	東文	理科	算術	地理	歴史	平均
唐寶鐸	85	90	85	80	85	85
朱光忠	85	93	40	70	75	72.6
胡宗瀛	67	72	20	80	50	57.8
戢翼翬	75	80	40	60	40	59
馮閻謨	80	75	50	80	70	71
呂烈輝	75	95	100	70	80	84
金維新	72	60	20	50	30	46.4
瞿世瑛	答案用紙なし	答案用紙なし	答案用紙なし	答案用紙なし	答案用紙なし	—
劉 麟	答案用紙なし	80	40	65	70	63.8
呂烈煌	75	88	50	60	60	66.6
平均	76.8	81.4	49.4	68.3	62.2	67.4

\* 講道館所蔵「宏文学院関係記録文書」より酒井作成、小数点以下第二位を四捨五入。尚「嘉納治五郎先生の試験」評価は記録されていない。瞿世瑛に関しては「嘉納治五郎先生の試験」答案用紙は現存しているが、その他の教科の答案用紙は現存していない。

国内を中心としたものを学習していたといえる。これら試験内容から教育程度は当時の中等教育程度だとわかるが、金維新の「歴史」の答案用紙に「日本小學校史談試験」と書かれていることや「算術」に於いて分数を学習していたことから、小学校程度の内容から学習していたことがわかる。使用教科書の断定は出来ないが、おそらく多くは日本国内の学校教育で使用されたものであろう。

答案用紙には成績評価も記されている。表1から平均点が最も高

いのが「理科」である。一方平均点が最も低いのが「算術」である。「算術」は他教科と比べても極端に低い。「算術」の平均点が極端に低いのはなぜであろうか。最低点である胡宗瀛の答案（一問目）を見てみよう。

分數(ママ)ヲ分數ニテワルトハ或分數ノ分母ガ其ノ分數ノ分母ニ同ジケレバ即チ除數ヲ被除數ニ顛倒シテワル視然モ若シ異母分數ニアラバ必ず先ニ同分數ニ直シテ其後前ニ挙ゲタルガ如キ方法ヲ算用スベシ

問題文は書き取れているがその主旨を理解することができなかったのではないだろうか。このことは金維新の「理科」の答案にも同様に見られる。

担当教師から嘉納に提出した意見書によれば以下の通りである。<sup>④⑩</sup>

学生ノ始メテ算術ヲ学シハ、昨二十九年十月ニ在リ。(中略)  
実ニ記數ヨリ始メテ整數ノ加減乗除四法ニ至ル。(中略) 其皆ノ初步ニシテ、未ダ十分熟達スルニ至ラズ。

思ったよりも学習効果が出ていなかったことがわかる。一八九八年の彼等の教育状況を報じる記事によれば以下の通りである。<sup>④</sup>

最初少しも邦語を解せざる彼等に、少しも支那語を知らざる教師が邦語を授け、又極めて理學數學等思想に乏しき彼等にかゝる學科を授くるにつきて、教師の工夫苦心したる所少からずといふ。

留学生と教師双方の言語の問題が大きかったのだ。劉麟の「理科」の答案用紙には「式ハヨロシケレモ(ママ)説明ガ分リマセン」と採点者からのコメントが書かれているほどである。さらに問題形式的文體習得に多大な時間を費やす科挙制教育の、論理的思考を必要とする「算術」等への影響も考えられる。嘉納もこれについて以下のように述べている。<sup>(4)</sup>

支那は、八股文の試験を以て人才登用の唯一の方法となし、之に及第せしものを以て教育の結果ありたるものと看做したり。(中略) 其學べる學は、實用に遠き死學にして、其修めたる業は適々人間の精神上の發達を妨ぐるに過ぎず。其試験の要求する所は、浩瀚なる書籍を暗記するにあるが故に暗記の力は非常に發達すれども、之と共に計畫應用の力を發達せしむることは能はず、(後略)

前述したが当時の清国に於ける各種の教育機関は科挙制のもとに

存続し、科挙及第こそが教育目的であった。科挙が問う能力は基本的に二つの事柄である。一つは定型的な詩文を作成する能力で、題と脚韻が指定される作詩題、そして答案の文章そのものが、字数にしても構成にしても韻律にしても高度な定型性を要求されるのである。五万種に及ぶ漢字を駆使し、様々な典故を踏まえつつ定型性の要求を満たすものを書かなければならなかった。もう一つは儒教經書の知識である。総数四十万字を超える四書五經と呼ばれる儒教經書を一字一句違わず暗誦し、かつ朱子の解釈に基いてその意味を記述することが要求された。清朝にとつての官僚は皇帝を輔佐し民の教化をすることであり、その指標となるものが傑出した文化能力と道德能力であった。つまり、前者は文化能力の有無を、後者は道德的能力の有無をそれぞれ検証するものである。したがって暗誦が基本教育であつた留学生らにとつて論理的思考を必要とする科目は未知なものであるが故にその教育効果がなかなか出なかつたといえよう。

思うように学習効果が出ない悩みは教師だけではない。胡宗瀛は「東文」試験の課題「歲晚述懷」に於いて「教師は熱心に教えてくれるがその通りに出来ない」旨を記していることから留学生も悩んでいたのだ。

これらの答案用紙の評価に疑問が残る。「算術」で八十五点であつた唐寶鏐の答案(一問目)を見てみよう。

理論 除法ハ乗数ト反對デ例ヘバ  $\frac{7}{8} \div \frac{4}{9}$  ト云フ問題ナ  
 ラバコレハ商ニ除数ヲ乗ケレバ被除数ガ出マスカラ  $\frac{4}{9}$  ハ即  
 チ商ノ  $\frac{4}{9}$  デ商ノ  $\frac{4}{9}$  ハ即チ  $\frac{7}{8}$  デスソレ故  $\frac{1}{9}$  ハ  $\frac{4}{9}$  ヲ四  
 倍少ナクシタノデ即チ  $\frac{7}{8} \times \frac{4}{9}$   $\frac{7}{8} \times \frac{4}{9}$  倍ハ即チ  $\frac{7}{8} \times \frac{4}{9}$  デ  
 ス

はたしてこれが評価通りの解答であらうか。つまり採点・評価基準がはっきりしていなかったのだ。また前述した担当教師から嘉納に提出した意見書によれば「今回ノ試験問題ハ務メテ平易ナルモノヲ択ビタレバ、其ノ成績ハ少シク実力ヨリ美ナルニ過グ<sup>(43)</sup>」という。したがって、全教科の成績評価によってその学習効果を判断することは早計であるといえる。

留学生の日本語教育はどうであつたらうか。前述した一八九八年の彼等の教育状況を報じる記事によれば以下の通りである。<sup>(44)</sup>

過る二年間は日本語學に重きを置き、傍ら普通學の初歩を授くる方針を採りたるに、最早通常の談話に差支なく、新聞雜誌も略ぼ之を解し、書簡文普通文も一と通りは綴り得るに至りたれば、これより在るものは直に専門の學校に通學することゝなるべく、在るものは他の専門の學科を修むる豫備として、英語、數學、理化博物學、地理、歴史等を修むることゝなるべし。

二年間は日本語教育中心であつたことがわかる。また、所謂四技能（聞く、話す、読む、書く）のバランスがいいという。留学生の答案用紙を見ると問題文が正しく書かれていることから「聞く」能力は相当あるといつてよい。「東学」が最低点である胡宗瀛の答案（課題「歳晚述懷」）を見てみよう。

メバタク一年半ニナリマシタ一年半ニナリマシタコレマデ諸先生ノ御熱心デ種々ノ學問ヲ教ヘナスツテ呉レマシタノハ実ニ有難イコトデゴザリマス（後略）（太字傍線筆者、以下同様）

傍線に試験採点者の直しが「呉↓下サ」と入っている。待遇表現に関する間違いである。上級学習者でようやく待遇表現が定着してくる。また初級レベルの間違ひはない。したがって中級レベルであるかと推測できる。

次に「東学」が最高点である唐寶鏐の答案（課題「歳晚述懷」）を見てみよう。

人ハ年暮ニナルト心配スルモノハ小供や相應ニクラスコトガ出來ル若イ人デアリマセウナゼト云フト小供新年ニナルコトヲ好ムバカリデスカラ勿論心配ガナク又若イ人ハモ一ツノ年ヲ取リテモマダ老人ニナリマセンカラコレモ心配ガナイ（後略）

傍線に試験採点者の直しがそれぞれ「ナルト↓ナッテモ」「スル↓シナイ」「人↓人タチ」と入っている。文のねじれからの誤答であるとは推測できる。しかし初級レベルの間違いがないこと、接続詞の運用力から上級前半レベルであろう。

同じく「東学」が最高点である朱光忠の答案（課題「歳晚述懷」）を見てみよう。

私ハ故郷ニ居リマシタトキ年ノ暮ニナリマシタナラ年毎日詩ヲ作リタリ酒ヲ飲ンダリシテ居リマシタナゼソウユ風ニシマシタカト云ヘバ人間ガ世ニ中ニ居ルトキハ極ク短カイデスカラ猥ニ一歳ヲ取リマシタラ大ヘン悲シイコトデスト思ヒマス夫デ詩ヲ作タリ酒ヲ飲ンダリスルコトハ悲シイ心ヲ慰メル唯一ノ方法デカラデス

下線に試験採点者の直しがそれぞれ「年↓削除」「作リ↓作ッ」「ユ↓ユウ」「ニ↓ノ」「タ↓タナ」「マス夫デ↓マシテ夫レデ」「作タリ↓作ッタリ」「デ↓デスト思ヒマシタ」入っている。活用、長音、語彙の初級レベルの誤答が多い。したがってこれに唐寶鐸と同じ評価するのは疑問である。

以上から評価基準が非常に曖昧になっているが、留学生の日本語能力は中級から上級前半であるといえよう。学習期間から考えて着

実に学習効果があったといつてよい。

前述した通り留学生と教師の言語の問題は大きかったが、日本語教育の教授法はどのように行っていたのであろうか。当時の教授法の手掛りとなる講道館所蔵の宏文学院記録がある<sup>(46)</sup>。それによれば、発音と語調を正確に、また流麗にさせるため日本人小学生に対する読本教授法を参考にしていたという。さらに以下のことも述べている。

日本語檐当以外ノ諸教員ト協力同調シテ生徒ノ發音及ビ語調ノ不完全ナル箇所ヲ怠ラズ矯制セシムベキ事（中略）概シテ日本語檐当外ノ教員ニ於テハ、自分ヨリ生徒ノ理解力ヲ杞憂シテ、片言ヲ用フルノ弊ハ支那学生教育ニ従事スル者ノ通弊也。此際教員一般ニ打合セテ駄舌的日本語ヲ用ヒザル様注意スルノ必要アルベシ

他科目との協力態勢によって日本語能力向上を図っていたことがわかる。他科目の教師はフォリナートークやティーチャートークで教育するのは無理もないが、教室内の日本語教育だけでは学習効果がなかなか出ないと感じていたに違いない。当時は日本語教授法が体系化されていたとはいえないが、早くも他科目教師との提携をしていたのだ。時代を超えた普遍性を持つ予備教育機関としての教育

方法をこの時点で編み出していたのは注目に値する。

#### 4 留学生教育効果

一八九九年六月、三年間の留学教育が修了した。十名全員が卒業できたわけではない。残念ながら正式記録としての卒業生数の記録は見つからなかったが、『國士』第二十一号によればその数六名、さねとうけいしゅうによれば七名である<sup>(48)</sup>。卒業生数七名についてさねとうけいしゅうによれば七名であるという。おそらく遅れて入学した補欠留学生の呂烈煌が六名と一緒に卒業できなかったのであろう。まだ調査研究の余地があるが本稿では、卒業生数七名とする。留学生の名前と進路は以下の通りである<sup>(49)</sup>。

唐寶鏐…首席で卒業、長崎領事館副領事事務取扱。一九〇一年東京公使館詰めとなり宏文学院講師を勤めるかたわら東京専門学校進学。卒業後早稲田大学法科進学。一九〇五年同校卒業後帰国、科挙進士に及第。皇族載沢殿下が出洋政治視察大臣として来日の際、随行員に命じられ、明治天皇に謁見勲五等に叙せられる。一九一〇年に陸軍刑法起草、北京・天津に法律事務所開設、弁護士会長を務む。

朱光忠…四川省の候補道台。その後、奉天鉄嶺の交渉員。

胡宗瀛…東京専門学校進学。卒業後東京農学校進学。科挙進士に

及第。満州国財政部。満州国の鉱山会社理事。

戢翼翬…東京専門学校進学。卒業後早稲田大学政科進学。科挙進士に及第。一九〇〇年、唐寶鏐と共著で日本語教科書『東語正規』を出版。日本書籍翻訳出版社設立。下田歌子と共同で上海に出洋学生編集所設立。同年、変法思想の唐才常の蜂起に参加。一九〇八年、西太后が光緒帝を廃する際、新聞記者を呼び批判会見しようとしたため湖北省に帰されたが湖北省官職に就く。

呂烈煌…外務部通訳官、後に課長。

馮闓謨…北京の師範学校の通訳。陸軍学校通訳助教、後に主事。

呂烈輝…高等判事、学校教授。

当初の清国側の留学目的は日本語専門家養成であった。留学生全員がその職に就いたわけではなかったが卒業生四名は日本語関係に携わっている。特に唐寶鏐と戢翼翬は、画期的な日本語教科書『東語正規』を出版<sup>(50)</sup>、その後の中国人留学生の日本語教育に大きな貢献をした。

ほとんどの留学生が高い地位に就いている。特に唐寶鏐、胡宗瀛、戢翼翬は進士に及第している。暗記中心の科挙制度下に於ける試験制度であったにもかかわらず進士に及第しているが、この背景は科挙制度の改革があった。清国は近代産業を興すためには、もはや官

人登用Ⅱ科挙を改革し旧来の科挙制度そのものを全面廃止しなければ対応できなかったのである。一九〇一年、科挙試験の改革である所謂「八股取士の法」の廃止、同年、張之洞の「鼓勵遊学章程」、翌年には「考驗出洋畢業生章程」で選考規則が定められ、帰国留学生に対し留学生登用試験を行い合格者に対しては在外年数と学校の程度を斟酌して進士・挙人号と官職が授与されることとなった。第一回留学生登用試験は一九〇五年に行われた。唐寶鐸、胡宗瀛、戢翼翬はこの第一回留学生登用試験を受験したのである。<sup>(41)</sup>試験内容は「國際公法問題」、「訴訟法問題」、「財政問題」、「機械学問題」、「化学問題」、「經史問題」である。<sup>(42)</sup>資料の關係上、「經史問題」はどのような内容であるかは不明であるが、その他の試験内容は、嘉納塾で行われた「普通学」、高等教育機関レベルを修学できていれば十分に解ける問題である。第一回留学生登用試験に於いて日本留学生は十四名受験している。<sup>(43)</sup>『東京朝日新聞』一九〇五年七月十一日二面によれば八名に進士を五名に挙人を与えられたという。これも日本留学評価を高めた要因の一つであるといつてよい。

一八九六年派遣の留学生の卒業直後である一八九九年十月十二日に嘉納は清国皇帝より贈与された第二等第三雙龍宝星を受領し佩用することを許されている。<sup>(44)</sup>これは清国国家から嚆矢の留学生教育を認められたことを意味する。そして一九〇二年から清国政府は嘉納に行政・教育等の従事者に対する資質向上を目指すために速成教育

を大量に依頼することとなる。つまりその後の日本語専門家だけでなく近代化を図るための留学生派遣へとなるのである。このきっかけは張之洞の『勸学編』や姚錫光の『東瀛学校挙外』等の出版物、清国へ直接日本留学を働きかけた清国駐劄公使矢野文雄や参謀本部の福島安正等、数多く考えられるが、一八九六年派遣の十三名の留学生と補欠留学生一名の留学生教育効果もそのきっかけの一つとなったといえよう。

嘉納は卒業式に「諸子は年月日の割合には、良好なる成績を得られ、又修學中品行方正にして、能く學生たるの本分を守りたり。<sup>(45)</sup>（中略）誠に予の満足に思ふ所なり」と述べ、留学生を称えと共にその留学成果を評価している。

では、留学の主役である卒業生はどのように思ったのであろうか。卒業生総代として戢翼翬は以下の答辭を行なった。<sup>(46)</sup>

（前略）先生ノ正大ナル議論ヲ聽タルガ故ニ、我等ノ腦漿ニ浸淫シ、三年前ノ思想ニ比較スレバ、眞ニ別人ノ如キナリ、嗚呼善イ哉先生ノ教育我等能ク感奮セザル可ケンヤ。

（中略）若シ先生ノ徳ヲ以テ諸般ノ弊政ヲ改革シ、支那ヲ第二新世界ニ造ラシメ、他ノ文明諸國ト相馳騁シテ敗セザルヲ得バ、即チ先生ニ酬ユル所以ナリ（後略）

留学生自身も留学教育による思想変化を自覚していることがわかる。そして母国改革の必要性を強く感じることとなったのである。これは後の留学生らに受け継がれていくのである。清国政府、受け入れ機関、留学生これら三者の満了した結果となったのである。

## 5 結語

一般に国家再建のため実用的な西洋学を学ぶ目的で清国政府は日本留学を開始したといわれている。しかし組織的中国人日本留学生の始まりである十四名の留学目的は日本語専門家、つまり通訳官養成であった。日本は「富国強兵」「脱亞歐入」のもと留学は欧米に派遣することであり受け入れることの意義を見出すことができなかった。しかし、それにもかかわらず、留学生教育を依頼された嘉納治五郎は受け入れ態勢を整えることができないまま十四名を受け入れたのである。言語と科举制度教育の弊害から留学生と教師双方の手探りによる教育であり、教育程度は小学から中学程度であった。全員が卒業できなかったとはいえ、清国政府、受け入れ教育機関の嘉納、留学生は満足しており、また留学生の卒業後の活躍ぶりは目を眩(くら)るものがある。この結果、清国皇帝は嘉納に勲章を授与したほどである。その後は周知の通り清国国内で日本留学ブームが生じる。彼等十四名に対する留学生教育の成功もそのきっかけの一つとなつたといえよう。そしてこの留学教育成果は後世に大きな影響を残す

こととなる。それは大きく二点である。

第一に日本語教育と普通学を中心とする留学生予備教育の発展である。唐寶鏐と戡翼輩等のように留学生による日本語教育の貢献はいうまでもないが、松本亀次郎、松下大三郎など現場で留学生からの鋭い質問に触発されヒントを得、日本語教育の実践を積み重ねることによって日本語文法研究、日本語教育の発展に繋がったのである。<sup>57)</sup>

留学生の増加に伴って受け入れ教育機関も次々と創設する。特に嘉納の宏文学院<sup>58)</sup>は中国人留学生教育の大本山となる。これらの教育機関は日本語教育と普通学を中心とした予備教育を行っていたがこの礎を築いたのは嘉納塾だったのである。

第二に国策としての留学生教育観である。当初、嘉納は国策上留学生教育の意義を見出せなかったが、唐寶鏐ら卒業生に対し「然れども諸子は決して之に甘んぜずにして、更に習得したる日本語を以て、各種の學術を研究し、今日の新知識を得ざる可からず、今や東洋多事なるの際、諸子は益々自愛して大清國の為に、將た東洋の平和と隆盛の為に盡力せられん事を望む<sup>59)</sup>」と述べている。つまり後に嘉納が主張する中国人留学生教育が「清国保全」「唇齒輔車」を柱とする日中関係と東アジアの平和に寄与するという留学生教育の根本的思想に繋がり、国内外に大きな影響を与えた。清国政府も日本留学が国家再建にとって重要なものと認め一九〇二年以降から留学

派遣先の主流を日本とし、国を挙げての日本留学ブームが起こるのである。さらに留学生らの国家観も変化していくことになる。そして清国政府自らの近代化を留学生から皮肉にも「革命」という形で迫られていくのである。

まさにこれらに至ったのは全て十四名の清国人留学生がきっかけなのである。

## 注

(1) 細野(一九九一)によれば一八八八年三月五日に中村敬字の同人社に入学した張文成が最初の中国人留学生という。厳安生(一九九一)によれば一八九〇年六月に駐日公使館随員(通訳養成目的)の形で、段芝貴、李鳳年ら七名が最初だという。

(2) 主な先行研究は以下の通りである。

- ・松本亀次郎『中華五十日游記附 中華留學生教育小史・中華教育視察紀要』東亜書房 一九三一年
- ・実藤惠秀『中国人留学史稿』日華学会 一九三九年
- ・さねとうけいしゅう『増補 中国人日本留学史』くろしお出版社 一九七〇年
- ・二見剛史「戦前日本における中国人留学生予備教育の成立と展開」『国立教育研究所紀要』第九十四集 一九七八年
- ・阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版 一九九〇年
- (3) 外務省外交史料館所蔵『在本邦清國留學生關係雜纂 陸軍学生

## 海軍学生外之部

- (4) 右同書
- (5) 右同書
- (6) 『國土』第一号 一八八八年 四五—四六頁
- (7) 瞿立鶴『清末留學教育』三民書局 一九七三年 一一六頁
- (8) 嘉納治五郎講述、落合寅平筆録「柔道家としての嘉納治五郎」(十) 講道館文化會『作興』第六卷 第十号 一九二七年 二九頁
- (9) 細野浩二「近代中国留日学生史の起点とその周辺」早稲田大学東洋史懇話会『史滴』第十二号 一九九一年 五五頁
- (10) 『東京日日新聞』一八八五年五月十三日午後
- (11) 前掲注(3) 書
- (12) 前掲注(8) 書 二九頁
- (13) 講道館所蔵「宏文学院関係記録文書」の嘉納治五郎が楊樞公使に送った書状より。尚、この書状には年月日が記されていないが、楊樞が公使に着任したのが一九〇三年なのでそれ以降だと思われる。
- (14) 前掲注(3) 書
- (15) 松本亀次郎前掲書八頁によれば、「唐寶鏐、朱忠光、戢翼翬諸氏である」と全ての留学生の名前は明らかになっていない。また、さねとうけいしゅう前掲書一五頁によれば、「唐寶鏐・朱光忠・胡宗瀛・戢翼翬・呂烈煌・呂烈輝・馮閭謨・金維新・劉麟・韓壽南・李清澄・王某・趙某」としている。しかし瞿世英を留学生としていない、また名前が違う(李清澄ではなく李宗澄)、名前が不明(王某、趙某)、さらに年齢は十八歳—三十二歳と間違っている。年齢には触れていないが老松(一九七八)、細野(一九九一)等も同様である。

- (16) 注(3) 前掲書
- (17) 講道館所蔵「宏文学院関係記録文書」
- (18) 実藤恵秀『近代日支文化論』大東出版社 一九四一年 一八五頁
- (19) 嚴安生『日本留学精神史 近代中国知識人の軌跡』岩波書店 一九九一年 一二八―一二九頁
- (20) 黃尊三著、さねとうけいしゅう・佐藤三郎訳『清国人日本留学日記 一九〇五―一九一二年』東方書店 一九八六年 二九頁
- (21) 横山健堂『嘉納治五郎大系 嘉納治五郎伝』第十一卷 本の友社 一九八八年 一七二頁
- (22) さねとうけいしゅう『中国留学生史談』第一書房 一九八一・九五頁
- (23) 矢吹晋編、鈴木博訳『周恩来『十九歳の東京日記』一九一八。一・一―一二・二三』小学館文庫 一九九九年 三九―四〇頁
- (24) 二〇〇四年十二月一日に行った、筆者の鄭東耀氏に対する聞き取り調査より。  
祖父の鄭餘生が紹興から来日し、一八九九年、中国人留学生相手の中華料理食堂を神田で開店した。店名は付近に下宿していた中国人留学生によって、日本の明治維新に学んで祖国を再建したいという願いを込め命名された。二代目の父鄭勇昌から高級中華料理志向となり日中の高官、商社員が来店したという。現在は銀座、赤坂など四店舗を開業中である。  
維新號では留学生らの会議が行われていた。特に一九一八年五月六日、維新號に於いて宴会を名目に会議を行っていた留学生らが日

本の官憲に検挙された所謂「維新號検挙事件」として中国人留学生史にとって重要である。これは日華共同防敵協定に対し一斉帰国し反対するための会議であった。東京日日新聞一九一八年五月七日によれば検挙された留学生は帝大、高工、早大、明大、その他都下の各校にある官私費生であった。その中で湖南省出身の女子高師卒業予定の女子学生二名もいたという。鄭東耀氏が父鄭勇昌から聞いた話によれば官憲が踏み込んだとき厨房に逃げてきた留学生にコック服を着せ置いたという。

- (25) 維新號所蔵記録
- (26) 『家庭週報』第七五〇号付録一九二四年六月二十四日によれば来客料理としての家庭料理講習会であり、講習内容は日本料理、西洋料理、支那料理であった。維新號開祖鄭餘生は同年七月二十日と二十一日に助手十数名を伴って講義を行った。
- (27) 注(3) 前掲書
- (28) 右同書
- (29) 注(17) 前掲書、尚、胡宗瀛の卒業証書に記されていたものである。また注(21) 前掲書 一八七―一八八頁に掲載されている、町田弥平から嘉納に送った意見書によれば富永岩太郎も講師であったと推測できる。
- (30) 注(18) 前掲書 一八六頁
- (31) 右同書 一八六頁
- (32) 注(17) 前掲書
- (33) 注(6) 前掲書 四〇頁によれば「或ものは他の専門の學科を修むる豫備として、英語、數學、理化博物學、地理、歴史等を修む

ることとなるべし」という。また、さねとうけいしゅう注(2)前掲書三八頁によれば体操も行われていたという。

(34) 注(21) 前掲書 八九頁によれば嘉納は「体育の父」であり本邦体育発達史に特筆すべきであるという。また、一八九六年三月、嘉納は東京高等師範学校に於いて初めて運動会を行ったという。

(35) さねとうけいしゅう注(2) 前掲書三八頁

(36) 注(21) 前掲書 一七四頁

(37) 注(17) 前掲書 この資料によれば「理科」の答案用紙集の初頭に「清国留学生成績(自三十一年五月十一日 至七月十六日)」と記されており、各留学生の第一回、第二回、平均の成績評価が記録されている。「理科」の答案用紙に記されている成績評価から、第二回、つまり一八九八年七月十六日に行われたのであろう。尚、胡宗瀛の成績評価は「清国留学生成績(自三十一年五月十一日 至七月十六日)」によれば七五点であるが答案用紙は七二点である。本稿の表1には答案用紙の成績評価を記した。

(38) 注(17) 前掲書

(39) 注(21) 前掲書 一八七—一八八頁に掲載されている町田弥平から嘉納に送った意見書によれば試験に関しては「問題ハ口唱シテ之ヲ書取ラシメタレバ(後略)」という。

(40) 右同書

(41) 注(6) 前掲書 四〇頁

(42) 『國土』第五十一号 一九〇二年十二月十日 二—三頁

(43) 注(21) 前掲書 一八七—一八八頁

(44) 注(6) 前掲書 四〇頁

(45) 注(17) 前掲書 「◎日本語教授法改良ニ就キテノ鄙見」と題されている。

(46) 高見澤孟・伊藤博文・ハント・蔭山裕子・池田悠子・西川寿美『はじめての日本語教育 基本用語事典』アスク出版社 一九九七年 一九九頁によれば、フォリナー・トーク (Foreigner talk) とは、母語話者とその言語が流暢ではない第二言語話者と話すときにみられる言語使用を簡略化する現象。例えば発音が不自然に明瞭で話すスピードが遅いこと、簡単な語彙・文法・文構造を使用すること、トピックを文頭に持ってきて話題を明示することなどである。またティーチャー・トーク (Teacher talk) とは、第二言語の教室で教師が学習者とコミュニケーションを図るために使用する簡略化した言語である。

(47) 『國土』第二十一号 一九〇〇年 七一頁

(48) 注(18) 前掲書 一八七頁

(49) 右同書 一八七—一八八頁と注(22) 前掲書 一三—二〇頁と注(21) 前掲書 一六一—一六二頁と、外務省政務局編纂『清國時報』第六号 一九〇五年 三〇—三二頁と阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版 一九九〇年 五八頁よりまとめたもの。

(50) 注(35) 前掲書 三九—四〇頁によれば、従来の教科書は中国語をもとにし日本語を考える教科書であった。また、不正確な箇所も多かった。しかし『東語正規』は、日本語の発音から始め、変体仮名、テニヲハ等を扱ったという。つまり翻訳型教科書から留学生の誤用が多い発音、助詞を重視した教科書といえよう。

(51) 外務省政務局編纂『清國時報』第六号 一九〇五年 三〇—三

二頁

(52) 右同書

(53) 右同書

(54) 講道館監修『嘉納治五郎大系』第十三巻 本の友社 一九八八年 四四頁

(55) 注(47) 前掲書 七一頁

(56) 右同書 七二頁

(57) 関正昭・平高史也編『日本語教育史』アルク 一九九七年 三八―三九頁、松下大三郎は清国留学生のための教科書『漢訳日語階梯』を編集。松本亀次郎も同じく『言文対照 漢訳日本文典』を手掛け、昭和中華まで四〇版を重ね、中国では海賊版も出回ったほどである。

(58) 留学生の増加に伴い、一九〇一年十二月、嘉納治五郎は弘文学院を設立。その後、宏文学院に改められた。その理由は、嘉納先生伝記編集会『嘉納治五郎』(講道館、一九六四年)一七四頁によれば、乾隆帝の諱が弘暦であるため、旗人出身留学生の中には弘文と書くのを好まなかったためという。

(59) 注(47) 前掲書 七一頁